

聖書:列王記第二7章3～20節

説教:神の人が告げたことばのとおり

はじめに

アラムの国の王であったベン・ハダドは、あるときイスラエルに攻め入り、当時の首都であったサマリアの町を包囲します。町の人々は門を固く閉ざして城壁の中に立てこもり、備蓄していた食料で耐え忍びます。イスラエル王も、服の下に粗布をまとい、悔い改めの姿勢をとって神の救いを祈り求めました。しかし願ったような神の救いはありません。とうとう町の中から食べ物が無くなってしまいます。ある一人の母親は、家族を生き延びさせるために子どもの肉を食べなければならなくなったことを悲しみ、「わが主、王よ。お救いください」と叫ぶのです。これを聞いたイスラエル王は、服を引き裂きながら神をのろい、神の人と呼ばれていた預言者エリシャに怒りをぶつけ、殺そうとします。そのときエリシャはこう言います。「主はこう言われる。明日の今ごろ、サマリアの門で、大麦二セアが一シェケルで、上等の小麦粉一セアが一シェケルで売られるようになる。」いま町は、ネズミに至るまで一匹残らず食い尽くし、草も木の根も全部掘り尽くしてしまった状態です。エリシャが語ることばを聞いたイスラエルの侍従は、鼻で笑ってまったく信じようとしなかった。これが前回までのあらすじです。

エリシャが語ったことばはどのようにして実現していったのか。それが今日の箇所にも書かれています。こんなことが起きるのかとにわかに信じられないかもしれません。神はどのようにしてイスラエルを救ってくださったのか。ご一緒に考えて参ります。

## 1 夜

### 1) ツアラアトに冒された四人

ここに登場する四人のツアラアトに冒された人たちは、サマリアが包囲されていたとき、町の門の入り口にいたと書かれています。それは民数記5章2, 3節にこうあるからです。「イスラエルの子らに命じて、ツアラアトに冒された者、漏出を病む者、死体によって身を汚している者をすべて宿営の外に追い出せ。男でも女でも追い出し、彼らを宿営の外に追い出し、わたしがそのただ中に住む宿営を、彼らが汚さないようにしなければならぬ。」

死体に触れた者もツアラアトに冒された者も、どちらの場合も宿営の外に追い出されるという律法です。それで門の外で暮らしていた。ところが町の外は大飢饉で食べ物がありません。また、たとえ町に入れたとしても、先ほど言ったように食糧が尽きている。ではどうするか。いつそのことアラムの陣営に行ってみようではないか。もしかしたら、そこで生き延びられるかもしれない。そうやって四人は、夕暮れになって立ち上がり、アラムの陣営の端にやってきたときは、夜になっていました。

### 2) 救いを独り占めする

四人は、何千何万という兵士たちひしめきあう音が聞こえるものと予想していたのですが、全く人の気配が聞こえてきません。夜ですから詳しくはわからないけれど、何らかの事情があつて皆どこかに行ってしまったらしいということだけはわかった。その何らかの事情については、6節前半にこうあります。「これは、主がアラムの陣営に、戦車の響き、馬のいななき、大軍勢の騒ぎを聞かせた。」

いま起きているウクライナの戦争について、いろいろな解説がされていますが、その中で「情報戦」ということばを聞いたことがあるでしょう。実際に兵器を使って戦うのとは別に、敵の国民に偽の情報や、マイナスの情報を流して、相手を攪乱したり、戦おうという気持ちをくじくのが狙いです。ここでも、ありもしない偽の情報を流して相手を混乱させ、戦意をくじいたわけですから、立派な情報戦ということなのでしょうが、いずれにしてもこれは主のみわざとして行われたことでした。

四人はだれもいなくなったキャンプに入り、腹を満たすと、手当たり次第に金目の物を略奪していきます。いっぽう町の人たちはとて言えば、敵が逃げたことは知らないままで、依然として飢えに苦しんでいます。彼らはこんなことを思ったのかもしれませんが。町の人たちからいままで散々に差別をされて、惨めな生活を強いられてきました。そんな恨みがあるので、町の人々には知らせたくない。今までの不幸を取り返すためにもこの幸いを自分たちだけで独り占めしよう、そんなふうに考えていたのではないか。

## 2 明け方

### 1) 今日は良い知らせの日

ところが時間が経つうちに、この四人はだんだん心刺されるようになり、9節でこんなことを言うのです。「もし明け方まで待っていたら、罰を受けるだろう。」なぜそう思ったのでしょうか。彼らがアラムの陣営の端に到着したのは夜でしたから、キャンプ全体は見えません。だれもいないのはどうしてか。「おかしい」とは思ったけれどそれ以上はわかりません。ところが、だんだん東の空が明るくなるにつれ、異常な出来事が起きたことがわかってきました。兵士が武器を放り投げ、馬を残して逃げる。そのようなまったく信じられないような光景が目飛び込んできた。その瞬間、自分たちは神の近くにいることに気がつきます。聖い方のそばに近づく者は、例外なく罪を自覚していくこととなります。アラムの兵士たちが逃げ去ったこと。それは救いの良い知らせのはずなのに、そのことをサマリアの人々に知らせようとせず、自分さえ満足できればそれでよいと考えた。その罪を神は必ず罰するだろう。ならば今何をすべきか。今日は良い知らせの日。グッドニュースを知らせなければならない。そう言って四人は町にとって返します。

### 2) 神の人が告げたことばのとおり

この知らせを聞いたイスラエルの王は、四人のツアラアトに冒された人が良い知らせを告げに来ても信じようとしません。これは敵の罠に違いないと判断し、家来たちに町の外に一步も出ないようにと警告します。もっともこれは無理もないことで、おそらく誰もがこのような判断をするのではないか。しかし話はそこで終わらない。この王は信仰の面では大きな問題をかかえてはいましたが、部下には大変恵まれていました。家来の一人が進言をするのです。このまま籠城を続けてもどうせ死ぬばかりなのだから、馬を出して確かめてみたらどうか。それもそうだとということになって、すぐに残っていた馬をとって走らせて見に行かせると、四人の言うとおりのこと。このことはすぐさまサマリアの十人にも知らされ、人々は食糧を求めて陣営に殺到します。その結果、小麦粉の値段は暴落し、一セアすなわちおよそ四キログラムが一シェケル、すなわちおよそ千円で売られるようになり、神の人エリシャが告げたとおりのことになりました。

## 3 神の救い

### 1) 罪人とともに働かれる神

今朝皆さんと考えたいことは、なぜサマリアの人々は救われたのかということです。神がイスラエルをあわれんでくださったから、そんなふうな説明はできます。確かにそのとおりなのですが、人間の側はどうなのでしょう。何もせず、ただ黙って座っていただけなのか。もちろん、そんなことはありません。神が私たちを救ってくださるとき、いろいろな人たちがそこに関わっていきます。それはオーケストラにたとえて説明するとわかりやすいでしょう。指揮者がタクトを振らなければ、オーケストラは音を奏することはできません。それと同じように、神が救いのタクトを振るとき、私たちはそのタクトに従って自分が持っている楽器を奏でていく。自分の出した音がオーケストラ全体でどんな役割を持つのか、自分ではありません。そこは神だけが知っています。でも結果を見ると、確かにすべてが調和していて、美しい音楽を奏でていく。

### 2) 罪を自覚する

こんなイメージを描きながら、この箇所に登場する二組の演奏者に注目します。一人目は、町の中にいたあの母親です。26節後半。「わが主、王よ。お救いください。」家族を生き延びさせるためとは言え、わが子を食べなければなりません。食事に困ることのない私たちが、高い所に立つようにしてこの母親に、「あなたは間違っている」と言うことはできるでしょうか。神の前に正しいことでないことを一番良くわかっていたのはこの母親なのです。けれども、そうしなければ全員死んでしまう。その狭間で母親は叫ぶしかなかった。「わが主、王よ。お救いください。」この叫びが、「救い」という音楽を演奏するなかで、どのように用いられていくのか、母親はわかりません。しかしこの叫びが救いをもたらしていくのです。

もう一組の演奏者は、ツアラアトに冒されていた四人です。彼らはだれもいないアラムのキャンプを見て、救いを独り占めしようとしていました。ところが、神の臨在に触れたとき、自分たちのしていることは間違っていると悟ります。もし彼らが罪の自覚をすることがなかったなら、サマリアの人々は全員死んでいたはず。彼らが心を刺されて神に立ち返ったことにより、「救い」という音楽は完成していくのです。

こうして見てくると、神の救いがどのようにして成し遂げられていくのか、よくわかります。あの母

親と四人の人たち、全員が罪の自覚を迫られました。

### 3) 罪の告白によって

神が語られたとおりに実現していく。それだけ聞くと、なにか時計が決まったとおりに動くように自動的に becoming していくのか。私たちは何もしなくて良い。あるいは逆に、私たちが一生懸命何かをしても、結局無駄だ。そんなふうに思っていたかもしれません。どちらも間違いです。神は、私たちといっしょに働こうとされます。「こんな私が？」と誰もが疑うでしょう。「立派な信仰者を神は用いる」そう思っていましたか。今日の箇所を見てください。どこに立派な信仰者が出てきたか。みんな不信仰な人たちばかりです。それでもただ一つ言えるのは、その不信仰な者たちが、「自分は不信仰者です」と言えたこと、神はその告白を通して、救いのみわざを約束のとおりになし遂げてください。私たちは、救いを完全に成就して下さった主イエスの十字架の前で、このことを告白し続けてまいります。